

学生カンファレンスを意識した 小児看護学実習展開について

竹村眞理

健康科学大学 看護学部 看護学科

Development of Pediatric Nursing Practicum Focusing on Group Discussion

TAKEMURA Mari

要旨

臨地実習におけるカンファレンスは、学生が自己の行動を振り返り、看護の対象者である人の理解や必要な看護について考えを深め、学生同士で情報を共有しあう教育的な機会である。昨年文献研究を行いカンファレンスの効果、カンファレンスの教材化などカンファレンス場面についての検討はあるがカンファレンスについての事前学習および実習展開の中におけるカンファレンス運営・内容について具体的に取り上げているものは見当たらぬ事が分かった。そこで、今回は昨年入手できなかった先行研究および学生向け専門雑誌に取り上げられているカンファレンスの苦手な理由及び実習開始時の教員・患者・学生関係を整理した。学生の困難感は「テーマが決まらない」ことやどのように参加するかが分からず「話し合う事がない」というものであった。実習開始時の学生の緊張から来るストレスを軽減し実習展開の目的を達成するためにテーマ提示を行っているという報告があった。評価には教員と学生のずれがあった。以上のことから、担当する小児看護学実習において提示するカンファレンステーマを実習展開並びに準備教育について検討したことを報告する。

キーワード：学生カンファレンス、小児看護学実習

I. はじめに

看護基礎教育における臨地実習の展開の中で、必ず学生カンファレンスを取り入れている。

看護基礎教育では、看護職として看護実践の場における医療職者間の情報共有・意見交換などの連携および患者一看護師関係におけるコミュニケーション能力育成並びに問題解決能力育成の場¹⁾として必要としている。昨年、学生カンファレンスについて文献研究を実施し(2013～2015年)並びにweb検索した結果ヒットする先行研究を行った結果、学生側に視点をあてた研究では「学生の学びからカンファレンスの意義を論じたも

の」、「学生の学び獲得の要因としてのカンファレンス」に分類され、教員側に視点をあてたものは「教員のカンファレンスの工夫」「実習カンファレンスの運営」「教員の役割を評価する尺度開発」などがあり教員のカンファレンスの場での役割の重要性を示唆していた。しかし、カンファレンスの目的や運用方法についての説明は、実習のオリエンテーションでの実施が散見される程度で実習前にカンファレンスについての準備教育を実施しているという報告が見当たらなかった。

そこで、今回は、現代の学生の生の声およびそれらに対する回答を掲載する学生向けの専門雑誌

¹⁾, 臨地実習指導関係の書籍²⁻³⁾からカンファレンスに関する情報収集を行い担当している小児看護学実習におけるカンファレンス実践に向けた準備教育ならびにカンファレンステーマ提示を入れた小児看護学実習展開プログラムを検討したので報告する。

II. 臨地実習カンファレンスに対する学生の苦手意識とその対策

学生のカンファレンスに対する苦手意識には2種類あると考える。一つは意義のあるカンファレンスをしたいという積極的な要因と、話し合う事が思い浮かばず話題にすることが現在ないという消極的な要因である。

1. 積極的な要因による苦手意識

意義のあるカンファレンスをしたい学生が抱える具体的な問題は、「テーマが決まらない」と「意見交換ができない」である。

1) 苦手意識の具体的な内容

(1) テーマが決まらない

インターネットサイト⁴⁾及び、看護学生の臨地実習指導に関する文献において学生から聞く苦手意識の大半は「テーマが決まらない」ということである。この表現には、意義のあるカンファレンスをしたいという気持ちが現れている。意義というのは、カンファレンスを実施して「学べた」、「看護を深めた」活発な意見交換ができるることをイメージしている。そのために、いくつか「話題」を取り上げては、「学んだ事を発表するだけでは、それがどうなのかということにしかならない」「意見交換にならないからやめよう」ということになり、結局「テーマが決まらない」という事になっている。また、もう一つの理由は、意義のあるカンファレンスを実施し実習指導者ならびに指導教員から肯定的な評価を得たいという気持ちがあると考える。

(2) 意見交換ができない

カンファンレンスの運営を前もって考えているとシナリオを作っているようになる。シナリオから外れないよう意識するために、出された発言に対する感情・思考が制約された状態になる。

2. 消極的な要因による苦手意識

自身の学習に対して「困っていないわけではないが、何に困っているのか分からない」「自分が勉強すれば分かる事だから別にとりあげることではない」と自己完結するが解決行動に乗り出さない場合と、患者に対して「学生カンファレンスにおいて話題にしたいことが思い浮かばない」「患者さんに問題点は見当たらない」などである。

1) 困っていることはない、何に困っているか分からない

実習で困っていることがないわけではないが、勉強不足、情報収集不足であることをカンファレンスで取り上げる必要はなく自分が勉強すればよいことであると思っている場合がある。実習に来たのであるから勉強しなくてはならないと思っているが、勉強できていないことを自覚しつつどこからどのように手をつけていいのかわからないので、そのままにするというタイプである。

2) 患者さんに問題点は見当たらず、カンファレンスに出す問題はない

「困ったこと」「実施した事に対して確認したいこと」といわれても特に問題を感じていないためなんでもいいからといわれても話題の出しがない。

3. 苦手意識を変える対策について

特に学生カンファレンスが運営されにくいのは、実習開始時である。カンファレンスの苦手意識について記載されている複数の文献をもとに実習開始時の学生・患者・教員（実習指導者）関係を図1に表した。

教員は、学生に対して実習目標に到達することを期待し、意欲を持って欲しい・臨床の現象から色々気付いて欲しいと期待し助言をする。

学生は、実習単位取得を希望しており常に教員（実習指導者）の評価を気にしている存在である。「承認を受けたい」気持ちの反面には、臨床実習にて「自信がない」、「肯定してほしい」反面には人と比べて自分はまだまだ十分出来ていないのではないかと内心は自己否定している。しかし、

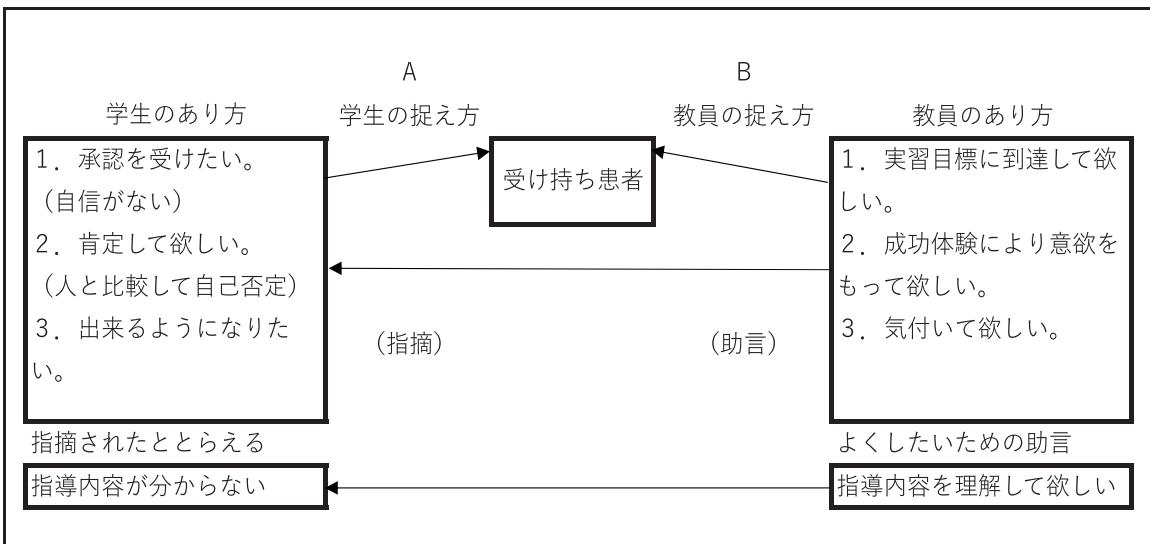


図1. 実習開始時の学生・患者・教員関係

自分はできるようにはなりたいという気持ちも併せ持っている。そこへ教員の助言は、「指摘された」として受け取られることがある。積極的な要因としての苦手意識を持つ学生に多々見られる。「指摘された」と受け取る学生の実習あるいはカンファレンスへの意欲は低下し、沈黙に終止する。消極的な苦手意識の要因の学生の反応は弱いように感じられる。

積極的な取り組みも消極的な取り組みに共通して言えることは学生自身が自分の情緒的な反応の範囲を脱出できていないことであるといえる。教員の教育的期待は当然学生に理解されていない状態である。各々の苦手意識回避について対策を述べる。

1) 積極的な要因による苦手意識：「テーマが決まらない」、「意見交換ができない」に対する対策

児玉⁵⁾は、「カンファレンスを盛り上げる」の中で、カンファレンステーマの分類を看護過程の5段階「情報共有を目的にする」「アセスメントの妥当性を確認する」「看護の方向性を確認する」「看護の方法を決定する」「看護の評価をする」としている。第1段階では、テーマを「家族の状況、主な介護について」とし、テーマを選んだ理由を述べ、得られた情報を日々のケアに取り入れることをねらいとすることを説明するところからカンファレンスをスタートし、得られた情報をどのよ

うに看護計画に取り入れるか具体的にまとめられるところを話し合いの着地点にすると例を述べている。

また、カンファレンスを「患者さんの健康に貢献する」ということであると理解する事が無駄な緊張や、緊張による発言困難を回避できるのではないかと述べている。意見を言えない自分や、間違ったことを言うかもしれない自分から意識を「患者さんの健康に貢献する」ことに集中するようということである。注意すべき点として、「こんな情報を知っている? (入院前の○○を知っている?)」「それは知らない」というような意見交換は一気に話し合いの雰囲気が下がるため「では○○についてご家族が来られた時に聞いてみようと思います」という具体的にできる行動計画としての回答をすると意見交換は続くと述べている。このような会話のスキルを学生と学ぶ必要があると思われた。実際にこれらのことを取り入れた試みとして、渡邊⁶⁾は、指導者がモデルになってカンファレンスでロールプレイを行ったことが、学生の自主的な発言に変化を与えるきっかけになったことと、学生の学びのレポート内容の質を高めたことを報告している。しかし、学生が「意味あるカンファレンスであった」という自己認識が薄いことから指導者と学生の目指すべきカンファレンスの共有ができるれば有効なカンファレンスに対

する双方のズレは解消されるのではないかと述べている。実際に見せるだけではなくフィードバックを言葉で行う必要が示唆されていた。ロールプレイは、自己客観視の機会をつくる方法として用いられるが、同時に場面を理解する方法を体験することができる。実習目標に基づいたテーマを紹介し、目的達成のプロセスとして説明することが学生に学習の筋道をつけることができるこことなると考える。

積極的な要因による苦手意識の対策として、実習におけるカンファレンスの目的・テーマの具体例を示し学習の筋道を示し、話のねらいは患者さんの健康への貢献であることに意識を集中するように説明することによって自己に集中する緊張を軽減する、などが考えられた。また事前準備として、会話のスキルを学習する機会を設ける必要が考えられた。

2) 消極的な要因による苦手意識：「困っていることはない」などに対する対策

島田⁷⁾は、実習開始後の日の浅い段階では、カンファレンステーマを提示したほうが学生のカンファレンスに対するストレス軽減になると共に、実習開始導入段階で基礎的知識に関するテーマを提示する事で、実習進度の違う学生個々にとって知識の確認になり、今後の看護実践のイメージ化につながったと述べている。学生の要望にそったテーマ提示をすることが課題であるとも述べている。同様に基礎看護学実習¹⁾におけるカンファレンステーマは実習展開の中に明示されていた。3回に分けられた実習の初回は実習目標に従ったテーマ提示があり、半年後の2回目は学生の自主運営、3回目の最終カンファレンスでは、学生の自主運営であるが学生同士が互いによいところを伝え合うという課題を含んだカンファレンス設定が計画されていた。

川島⁸⁾は、困っている事がなくとも「入院していること」自体が、普段のその人ではないとらえ、看護の方法の確認、決定という観点から患者紹介を入院からの経過・現在の状況や状

態を明確にすることをねらいにした話し合いをすすめることを推奨している。学生が、患者さんの生活を具体的にイメージしながら意見交換することで、関心は患者さんに向き、自分が何を学習しなければならないかに気付くのではないかと思う。

消極的な要因による苦手意識への対策は、教員側から実習展開に適したテーマ提示を行うことや、患者さんをどのような看護を必要としている人かということを客観的に見直すことで気づく機会になるのではないかと考えられた。

III. 小児看護学実習成果促進のために活用する カンファレンスの組み方について

小児看護学実習におけるカンファレンスにおいては、カンファレンステーマが学生側から提示できないグループもあった。これは、病院に入院している子どもに接することは皆無であることから病児の理解についてイメージ化が出来ない状況の学生が多い故と考える。また座学で、病児と家族に対する看護を学んでいるが、実際の病棟では、家族の付き添いがある場合、受け持ち患児のベッドは、ほぼ1日カーテンで囲われており学生がどのタイミングで患児・家族と接する事が許されるかということも極めて難しい状況である。

小児看護学実習の目的は「子どもとその家族のもつ健康問題を理解し、安全安楽な健康回復・健康の保持増進のために子どもの成長・発達過程に応じた援助を実践する基礎的能力を養う。また、実習全体を通して、小児看護の役割について思考する事ができる。」である。

入院している子どもと家族及び外来通院で健康回復・健康の保持増進をしている実際を知り、さらに外来において感染・非感染の子どもの交差する中で看護師の瞬時の判断に基づく小児科外来看護の特徴を実際に見学し知識として定着してもらいたいと考えている。そのため9日間の臨地実習のうち病棟実習7日間、と外来実習2日間を行い、小児看護の役割について考えが深まる事をめざしている。病棟実習では1名

の患児とその付き添いをされている家族を受け持ち、小児看護過程を展開する。病棟実習をする学生はほぼ4名であるが、全員が同じ入院病日の患児をうけもつわけではないため、学生によって急性期の急性期症状で、患児は付き添いの母親以外の接触を拒まれる場合や、退院前の上機嫌な患児とほつとしている家族を受け持つ場合等体験していることは、子どもの健康のレベルに従って様々である。外来実習は、学生2名で2日間ずつ交代し、1グループ6名が体験する。曜日ごとに午後の外来のスケジュールは乳児健康診断、予防接種、特殊予約外来等学生によって体験する事は異なる。学生の体験は異なるが、テーマ提示された内容でカンファレンスすることが、学生によっては振り返りになり、また今後の看護実践をイメージ化することになるのではないかと考える。9日間でテーマとして指示する内容は、実習展開に即して設定した。テーマ提示をしていない曜日は、第一週目の水・木曜日の場合は、情報収集段階における学生個々のジレンマやアセスメントを行っている中で分からぬ事、あるいは妥当な判断かど

うかについて学生自身がテーマを設定ができるように働きかける。第二週目は、小児看護技術に基づいた個別的な看護方法が計画・実践できているかが取り上げられ看護過程の一連を終える事ができると考える。学生全員が小児科外来を体験した二週目の水曜日に外来看護のまとめとして知識や体験の定着化を図るようにテーマを提示する。

以下の表は、テーマ提示を実習展開の中にいたものである。実習の前の週金曜日に直前のオリエンテーションを実施する。カンファレンステーマの提示を行い、事前学習として、カンファレンスの役割、運営について説明し、「実習前の不安とその対策について」をテーマにしたカンファレンスを模擬的に実施する。今後、領域内で検討を重ね、グループや学生から出されるカンファレンステーマの内容も加味し、調整をかけていきたい。

引用文献

- 1) 児玉善子：カンファレンスを盛り上げる！プチナース，vol 27 No8 2018 41-42
- 2) キャスリーンB.ゲイバーソン：臨地実習のストラテ

曜日	主な実習内容	カンファレンステーマ
月	実習初日 病棟オリエンテーション	小児病棟の特徴について小児の発達段階・疾患の特徴との関連づけた内容
火	一部の学生外来実習 病棟実習生：受け持ち患児選択	小児看護における情報収集
水	一部の学生外来実習 病棟実習生：受け持ち患児の看護	
木	一部の学生外来実習 病棟実習生：受け持ち患児選択	
金	一部の学生外来実習 病棟実習生：受け持ち患児の看護	受け持ち患児の看護方法の決定（確認）
月	病棟実習生：受け持ち患児選択	
火	一部の学生外来実習 病棟実習生：受け持ち患児の看護	受け持ち患児の看護実践評価
水	一部の学生外来実習 病棟実習生：受け持ち患児の看護	小児外来看護の役割と機能
木	一部の学生外来実習 病棟実習生：受け持ち患児の看護	最終カンファレンス：実習のまとめ
金	学内日	

- ジー.医学書院.2002
- 3) 川島みどり：看護カンファレンス.医学書院.1998
- 4) <https://nurse.mynavi.jp/conts/practice/14/>
「実習 悩み相談室」2019年10月28日
- 5) 1) 同上
- 6) 渡邊知美：精神看護学実習における学生カンファレンスの活性化の検討.日本看護学会論文集
精神看護 2015
- 7) 島田三鈴：成人急性期看護実習におけるカンファレンスマニフェストの有無による学びの検討
川崎医療複視学会誌 vol.17.No1 2007
- 8) 3) 同上